「もらう」と「得る」の意味分析

金　珉秀

キーワード：所有、語野、対立、意味素性

1．はじめに

現代日本語における「もらう」と「得る」が描いている事柄は、次の(1)(2)に見るように互いに似ていると考えられる。

(1) a. 大学だって資本主義政府の認可を受けたり、補助金を**もらった**りしているんだ。
(青春、p.126)

b. 大学だって資本主義政府の認可を受けたり、補助金を**得た**りしているんだ。

(2) a. 僕は会社へ長距離電話をかけ、工場長から長期欠勤の許可を**得て**入院した。
(黒雨、p.454)

b. 僕は会社へ長距離電話をかけ、工場長から長期欠勤の許可を**もらって**入院した。

ところで、次の(3)のような場合は、「もらう」が描いている事柄を「得る」で、また(4)では「得る」が描いている事柄を「もらう」で描くと不適切な文になる。

(3) a. なに、そればかりか、あいつはお母様から毎月小遣いを**貰って**いる。(楡家、p.926)

b.*～、あいつはお母様から毎月小遣いを**得て**いる。

(4) a.「姫君」は一方で生徒の人気を**得た**が、一方でその厳格さで寮生に怖れられていた。
(花埋、p.201)

b.* 「姫君」は一方で生徒の人気を**もらった**が、～。

「もらう」と「得る」の描いている事柄が似ているにもかかわらず、(1)～(4)のように適格性の相違が生じるのは、「もらう」と「得る」の意味素性の違いによるものと考えら

れる。そこで、本稿では「もらう」と「得る」の意味分析を行い、それらがどのような意味素性で共通し、また異なるかを考察する。

2．先行研究

先行研究で「もらう」は、宮地(1965)、大江(1975)、久野(1978)、奥津(1979・1983・1984・1986)等のように「くれる・くださる・やる・あげる・さしあげる・もらう・いただく」の7語を中心とするいわゆる「やりもらい表現」として取り扱われている。奥津(1979)は物の授受を表す動詞を授受動詞と名づけ、日本語では前記7語が最も基本的な授受動詞であるが、その他に「与える・贈る・授ける・授かる・受ける・受け取る・得る」などの類義語もあるとしている。

また、しみず(1977)、柴谷(1978)、砂川(1984)、杉本(1986・1991・1999)、益岡(1987)等は「もらう」に関する構文論的研究として挙げられる。しかし、これらの研究は「もらう」などの授受動詞だけを扱っているわけではなく、ニ格とカラ格の交替現象や格の意味役割など主に格の問題を取り上げている。

一方、「得る」の場合は辞書に頼ってきた面が多く、用法の記述だけに留まっているものが大部分であると考えられる。たとえば、森田(1996)は、「得る」と共起するヲ格名詞の意味によって、「得る」の個別的意味が“入手する、獲得する、勝ち取る、収める、受ける、～される、恵まれる”等さまざまな意味合いに揺れ動くとしている。だが、これらは「得る」の意味ではなく、文脈や場面ごとの解釈・用法なのである。

分類語彙表(1964)では、「得る」は「2.370　所有・取得」の項目に、「もらう」はそれの下位分類である「2.377　授受」の項目に属している。奥田(1983)はヲ格の名詞と動詞との組み合わせで動詞群を分類しているが、「もらう」と「得る」は「所有の結びつきを表す連語」の下位分類である「やりもらいの結びつきを表す連語」として扱っている。しかし、分類語彙表(1964)と奥田(1983)はそれぞれの動詞の意味分析を行っているわけではなく、様々な動詞群の分類に留まっていると考えられる。

国立国語研究所(1972)では、「もらう」を「受け取る、借りる、預かる、買う」など授受動詞と考えられる動詞群と互いに対照しながら、また、「得る」については「ありつく」「せしめる」との対照を行いながら、それぞれの意味・用法を記述している。だが、その他の多くの動詞の意味・用法も取り扱っているため、それぞれの動詞の意味素性の抽出に

おける説明が十分には行われていないように考えられる。

以上のことより、「もらう」に関する意味論的な分析は従来あまりなされておらず、いわゆる「やりもらい表現」の研究、そして格の問題を中心とする構文論的研究が大部分であると言える。また、「得る」の場合も意味論的な分析はほとんどなされておらず、辞書的な用法や分類に留まっていると考えられる。

3．所有の語野

コセリウ(1982)によると、語野とは共通の語彙的価値により結びついていながら、互いには対立関係にある語の集まりである[1]。そして、様々な動詞の中には所有に関わる事柄を描く動詞群があり、それらは一つの語野を形成していると考えられる。本稿ではこのような語野を「所有の語野」と呼ぶことにする。

国立国語研究所(1972)、しみず(1977)[2]は「もらう」を所有の移動を表す動詞として扱っており、分類語彙表(1964)では「得る」を「所有・取得」の項目に、「もらう」はその下位分類である「授受」の項目に分類されている。また、奥田(1983)も「もらう」と「得る」を「所有の結びつきを表す連語」として分類している。このように先行研究における「もらう」と「得る」は、所有に関わる動詞であるという点で共通しており、「所有」という共通の語彙的価値で結ばれ、「所有の語野」を成していると言えよう。

ところで、同一の語野に属している構成成員は共通の特徴で互いに結ばれている一方、それぞれはまた互いを区別する意味素性で対立しているものと考えられる。そこで、次節では、「もらう」と「得る」の共通の意味素性を抽出すると共に、それらを互いに区別する弁別的意味素性をも明らかにする。「もらう」と「得る」の意味素性の抽出にあたっては、同一の語野に属している構成成員、すなわち所有に関わる動詞群と対照しながら考察することが有効であると考えられる。

4．「もらう」と「得る」の意味分析[3]

4．1．共通の意味素性

次の(5)～(8)が描いている事柄は、それぞれの対象がそれを受ける側のものになるという点で共通している。

(5) 私は礼を言って窓口で金を払い、化膿どめの薬を**もらって**アパートに帰った。

(世界、p.546)

(6) 実はゲーリーは私たちの養子なの。ボブと結婚して五年もの間、私たちに子供が出来なかったので養子を捜していたら、ちょうど運良くあの子を**もらう**ことが出来たの。 (数学、p.320)

(7) 北海道のなら新しい土地が**貰え**そうなのだ。 (花埋、p.726)

(8) その日から彼は番人の許しを**もらって**、朝と夕方と日に二度、これら信徒たちの牢舎に出むいた。 (沈黙、p.283)

(5)～(8)における対象を見てみると、(5)(6)の「薬、子供」が空間移動のできるものであるのに対し、(7)(8)の「土地、許し」は空間移動のできないものである。また、(6)の「あの子をもらう」が描いているのは子供の物理的な空間移動ではなく、養子になったという事柄である。よって、対象が空間移動をすることができるかどうかというのは「もらう」においては無関係な意味素性であると考えられる。つまり、(6)～(8)の「あの子・土地・許可をもらう」が描いているのは、それらの対象が受ける側のものになるという所有(権)の移動に関わる事柄なのである。本稿では対象を与える側を「与え手」、それを受ける側を「受け手」と呼ぶことにする。

また、次の(9)～(12)の「得る」が描いている事柄も、対象が「受け手」のものになるという点で共通している。

(9) アルバイトなんて止めてしまいたいよ。18,000円を**得る**ということは大変なことですなあー。 (原点、p.121)

(10) この映画はアカデミー賞を**得て**、米国での人気が高いという。 (天声'91・4)

(11) 米国のミネアポリス市には、ビルとビルの2階をつなぐ大規模な歩行者通路網があって、市民から好評を**得て**いるという。 (天声'85・11)

(12) 祭り好きの友人の協力を**得た**こともあったが、損をしない程度には切符を売りさばけるメドが立った。 (一瞬、p.1178)

(9)(10)では対象が空間移動のできる「18,000円、賞」であるのに対し、(11)(12)における対象は空間移動のできない「好評、協力」である。したがって、対象が物理的な空間

移動のできるものであるかどうかは、「もらう」と同様に「得る」においても無関係な意味素性であると考えられる。そこで、(9)の「18,000 円を得る」と(11)の「好評を得る」とを比べてみよう。(9)が描いているのは、アルバイトをすることによって「18,000 円」が「受け手」の手に入るという事柄、すなわちもともと「受け手」が持っていなかった「18,000 円」が「受け手」のものになるという事柄である。(11)は、もともとはなかった「好評」が、市民から大規模な歩行者通路網に向けられるようになるという事柄である。したがって、(9)と(11)の対象はそれぞれ具体物、抽象物のように異なるが、それらが描いているのは「受け手」がもともと持っていなかった対象が「受け手」のものになるという点で共通していると考えられる。よって、「得る」が描いているのは所有にかかわる事柄であると言える。

以上、「もらう」と「得る」の意味素性を考察してきたが、先行研究でも指摘しているように「もらう」と「得る」は描いているのが所有に関わる事柄であるという点で共通していると考えられる。そして、先に挙げた(1)(2)において「もらう」と「得る」の描いている事柄が似ていると感じられるのも、「もらう」と「得る」が所有に関わる事柄を描くという点で共通しているからだと考えられる。本稿では、このように所有に関わる事柄を描くという意味素性を《所有》[4]と呼ぶことにする。

4．2．弁別的意味素性

本節では、《所有》に関わる事柄を描くという点で共通している「もらう」と「得る」がどのような意味素性で対立しているかを考察し、弁別的意味素性を明らかにする。4.2.1では対象の移動の観点から、4.2.2.では出来事の描写の観点から、4.2.3.では「もらう」と「得る」と共起するヲ格名詞の意味素性の観点から考察する。

4．2．1．対象の移動

次の(13)(14)が描いているのは両方とも所有にかかわる事柄であるが、「得る」で描かれている事柄を「もらう」で描くと、成立しない((13b)(14b))。

(13)a. 長い歳月をへてやっと、小さな空き家を自分の部屋にすることができた。「私は書斎を 75 歳にしてはじめて**得た**」というくだりを読み、心を打たれた。

(天声'85・5)

b.* ～。「私は書斎を７５歳にしてはじめて**もらった**」～。

(14) a. だが、燃料は海水からいくらでも**得られ**、放射能の強い核分裂生成物は生じない、というしろものである。 (天声'89・4)

b.* だが、燃料は海水からいくらでも**もらえ**、～。

(13)の場合、「自分の部屋にする」という文脈がないとしたら、「私は書斎を 75 歳にしてはじめてもらった」は適切な文である。しかし、そのような場合、「もらう」が描いているのは、たとえばお父さんから譲ってもらうというような事柄であって、(13a)のように自分の力で手に入れたという事柄ではない。また、(14a)が描いているのは、もともと「受け手」が持っていなかった「燃料」を所有するようになるという事柄であり、この場合「海水」は「燃料」がもともとあった場所にすぎない。よって、(14a)が描いているのは、「受け手」が対象を所有していなかった状態から所有する状態になるという事柄であると考えられる。一方、(14b)は不適切であるが、もし「海水」に臨時的に人間の素性（[＋hum]）を与えて人間同等のものとして（たとえば、擬人化あるいはおとぎ話のように）捉えるとしたら、「燃料は海水からもらえる」が描いている事柄は適切であろう。

一方、次の(15)～(17)のような場合は、(13)(14)と同様に所有にかかわる事柄を描いているが、「得る」で描くと(15b)(16b)は不適切な文になる。

(15) a. 医局へ出勤するとき、彼は欧洲叔父から**貰った**古背広を着る。 (楡家、p.1979)

b.* 医局へ出勤するとき、彼は欧洲叔父から**得た**古背広を着る。

(16) a. 米国のミネアポリス市には、ビルとビルの２階をつなぐ大規模な歩行者通路網があって、市民から好評を**得て**いるという。

b.* ～、市民から好評を**もらって**いるという。 (＝(11))

(17) a. 僕は会社へ長距離電話をかけ、工場長から長期欠勤の許可を**得て**入院した。 (黒雨、p.454)

b. ～、工場長から長期欠勤の許可を**もらって**入院した。

(15a)が描いているのは、もともと欧洲叔父のものである「古背広」が、欧洲叔父から彼に所有する主体が替わったという所有の移動を表す事柄である。そして、この場合「もらう」が描いているのは、「欧洲叔父が彼に古背広をあげる」という与える行為をも含意

する事柄であると考えられる。だが、このような出来事を「得る」で描くと、(15b)のように不適切になる。また、(16b)は不適切であるが、「*市民が好評を与える」のように描くことができないことから、「好評」というのは「市民」から「受け手」に向かって移動してくるものとは捉えにくいもの、すなわち特定の「与え手」が想定しにくいものであることが分かる。つまり、(16)の出来事は「与え手(市民)」から「好評」が移動してくるというようには捉えにくいので、「あげる」という行為を含意する「もらう」で描くと不適切に感じられるのであろう。

このように考えると、(17a)が描いているのは現在許可されているという状態を、(17b)は工場長が許可を与えるという事柄を含意しながら現在許可されているという事柄であると言えよう。つまり、「もらう」と「得る」の対象は同じく「許可」であり、それぞれが描いている事柄も似ているが、一方ではそれぞれの意味素性によってそれぞれの描いている事柄は互いに異なっているのである。

以上のことより、「得る」が描いているのは、対象を所有していなかった状態から所有する状態になるという事柄であるのに対し、「もらう」が描いているのは「あげる」という授受行為を前提とする事柄、すなわち「与え手」から「受け手」に向かって対象が移動してくるという事柄を含意する所有の事柄であると言える。本稿では、このような「もらう」の意味素性を対象の《授受性》と呼ぶことにする。そして、「得る」は対象を所有している状態に焦点が当てられており、《授受性》という意味素性は持っていないので、「もらう」と「得る」はこの意味素性で対立していると言える[5]。

ところで、次の(18)は所有に関わる事柄を描いているが、(18b)は不適切な文である。

(18) a. 設計図が捨ててあったから**もらって**来ちゃった。 (最期、p.69)
b.* 設計図が捨ててあったから**得て**来ちゃった。

(18b)が成立しないことは、「もらう」が《授受性》という意味素性を持っているということからは説明が付かない。つまり、(18)では「与え手」がないので、「与え手」から「受け手」に向かって対象が移動してくるという《授受性》は考えられない。よって、その出来事を「もらう」で描くことはできないはずであるが、(18a)は成立する。また、「得る」は《授受性》という意味素性は持っていないので、(18b)のように事柄を描くことができるはずなのに、(18b)は成立しない。したがって、このような場合は《授受性》の他に別

の意味素性が関わっていると考えられる。そこで、次節では、「出来事の描写」という観点から「もらう」と「得る」がどのような意味素性で互いに対立しているかを考察する。

4．2．2．出来事の描写

4．2．2．1．「もらう」の意味素性

次の(19)(20)が描いている事柄は、対象が「受け手」のものになるという点で似ている。

(19) a. 私は礼を言って窓口で金を払い、化膿どめの薬を**もらって**アパートに帰った。
b.* ～、化膿どめの薬を**買って**アパートに帰った。 (＝(5))

(20) a. あなたは、授業料を払って学生証を**もらい**、講義を受けていることについて何とも思わないのだろうか。 (原点、p.265)
b.* あなたは、授業料を払って学生証を**買い**、～。

国立国語研究所(1972：335)によると、「買う」はお金を払って品物を手に入れる事柄であり、(19)(20)は確かに「買う」という出来事である。そして、「買う」が描いているのは「売る」という行為が前提とされる所有の移動であるので、「買う」も「もらう」と同様に《所有》《授受性》という意味素性を持っていると考えられる。よって、《所有》《授受性》という意味素性だけでは、なぜ(19a)(20a)が適切で(19b)(20b)が不適切であるのかが説明できない。したがって、(19)(20)には《所有》《授受性》という意味素性の他に別の意味素性が関わっていると考えられる。

「お金を払って薬を手に入れる」という同じ事柄について、「薬局で薬を買う」のように描くことはできるが、(19b)の「*病院で薬を買う」のように描くことはできない。また、「学校でお金を払ってある物を手に入れる」という同じ事柄について、「学校(の本屋)で本を買う」のように描くと適切であるが、(20b)の「*学校(の事務室)で学生証を買う」のように描くと不適切な文になる。(19b)が不適切であるのは、一般的に病院に行くというのは病状などを医者に見てもらうために行くのであって、「薬を買う」というのはそれに伴う副次的な出来事であるからだと考えられる。薬は薬局でも買えるものであり、「薬局」というところはデパート、コンビニエンスストアなどと同様にお金を通じた売買が行われる場所である。確かに病院も診療費などのお金を払って医者に見てもらうという点で、お金を通じた売買が行われる場所ではある。しかし、他の場所での売買とは異なって、病院

で「医者に見てもらう」というのは病院でしかできない出来事であるため、医者に対する「受け手」の恩恵・感謝などの主観的な感情が含まれている表現であると考えられる。また、(20b)の「*学校で学生証を買う」が不適切であるのは、誰もがお金を払えば学生証を買えるわけではない(もし不正な方法でお金を払って学生証を買うことができたとしてもその学生の身分まで買うことができるわけではない)からだと考えられる。つまり、お金を通じた売買行為ではあるが、他の売買行為とは異なり、「授業料を払って学生証をもらう」が描いているのは、学生の身分である人に限られた特権のようなものであるという「受け手」の受益などの主観的な感情を表す出来事であると考えられる。以上のことより、「もらう」が描いているのは「与え手」に対する「受け手」の恩恵・感謝・受益などの主観的な感情が含まれた事柄であると言える。

また、次の(21a)(22a)の「もらう」が描いている事柄は、それぞれ「拾う」「飲む」が描いている事柄と似ている。

(21) a. 設計図が捨ててあったから**もらって**来ちゃった。 (=(18a))

b. 設計図が捨ててあったから**拾って**来ちゃった。

(22) a. 典子は、「**もらう**よ」と、征哉の飲みかけのコーヒーをヒョイと取って、ガブッと飲んだ。 (決闘、p.45)

b. 典子は、「**飲むよ**」と、征哉の飲みかけのコーヒーをヒョイと取って、〜。

(21a)(22a)で「もらう」が描いている事柄は、実際は「拾う」「飲む」という出来事であり、(21b)(22b)のように描くこともできる。だが、「拾う」「飲む」という出来事を、(21a)(22a)のように「もらう」で描いていることには何らかの理由があるのであろう。(21)の場合、「設計図」は落ちてあったものであって、実際に「与え手」は存在しないので、《授受性》という意味素性を持つ「もらう」で描くことはできないはずである。だが、「拾う」という出来事を(21a)のように「もらう」で描くことによって、話し手は設計図を勝手に取って来たのではない、あるいは設計図が自分のものになったという受益的な気持ちを描くことができるのであろう。また、(22a)の「もらうよ」が描いているのは実際には征哉の飲みかけのコーヒーを勝手に飲んでしまう出来事である。だが、「もらう」でその出来事を描くことによって、話し手は相手の許可なしで勝手に飲むのではないという主観的な気持ちを表すつもりであると考えられる。

ところで、(21a)の出来事を「得る」で描くと、次の(21)'のように不適切になる。

(21)'＊ 設計図が捨ててあったから**得て**来ちゃった。　　(＝(18b))

(21a)が描いているのは、《授受性》とは無関係な所有を表す事柄であるので、「得る」で描くことができるはずなのに、(21)'は不適切である。したがって、「得る」は「与え手」に対する「受け手」の感謝・恩恵・受益などの主観的な気持ちを表すという意味素性を持っていないと考えられる。

以上のことより、「もらう」は「与え手」に対する「受け手」の恩恵・感謝・受益などの主観的な感情を表すという意味素性を持っていると考えられる。本稿ではこのような「もらう」の意味素性を《恩恵性》と呼ぶことにする。一方、「得る」はこのような《恩恵性》という意味素性は持っていないと考えられる。したがって、「もらう」と「得る」は《恩恵性》という意味素性で互いに対立していると言える。

4．2．2．2．「得る」の意味素性

国立国語研究所(1972)では、「得る」と「ありつく」は両方ともある対象を手に入れるという意味であるとしている。そして、「ありつく」は対象を得ることの不確定性、偶然さを表しているので、労働などの当然の報酬として求めていたものが入ってくる場合には、次の(23)のように「ありつく」ではなくて「得る」が使われるとしている。

(23) 金は彼が刑務所ではたらいて**得た**金であった。　　(国研引用、p.30)

国立国語研究所(1972：30)では、(23)の場合、偶然性のはいりこむ余地はほとんどなく、働けばかならず金がはいってくることはわかりきっているのであるとしている。だが、次の(24)(25)のような場合は、「得る」が描いている事柄が偶然性のない当然の結果のものであるとは捉えにくい。

(24)「姫君」は一方で生徒の人気を**得た**が、一方でその厳格さで寮生に怖れられていた。　　(＝(4))

(25)「兼徳」の応援に力を**得て**、喜助が人形づくりに本腰を入れはじめたのは、二ど

めの忠平の訪問後まもなくである。　　（雁寺、p.411）

(24)(25)の「人気、力」というのは、「受け手」が努力したり、応援を聞いたりさえすれば得られる当然の結果のものではない。したがって、当然の結果であるかどうかというのは、傾向としてはあるとしても「得る」の意味素性として設定するには物足りないのではないだろうか。そこで、次の(26)～(29)を見てみよう。

(26) a.　彼は若い妻を**もらった**。　　b.　彼は若い妻を**得た**。
(27) a.　彼は若くない妻を**もらった**。　　b.* 彼は若くない妻を**得た**。
(28) a.　彼は千円を**もらった**。　　b.　彼は千円を**得た**。
(29) a.　彼は千円札を**もらった**。　　b.* 彼は千円札を**得た**。

(26)～(29)は所有にかかわる事柄であるという点で共通している。(26)(27)における対象は同じく「妻」であるが、(26b)が適切であるのに対し、(27b)は不適切である。だが、「若くない人は物事をよく知っており、面倒見がいい」などのように「若くない妻」がプラス評価として用いられた場合には、「若くない妻を得る」は許容度が上がる。また、(28)(29)についても同様なことが言える。これらの対象は同じく「千円」であるが、(28b)が適切であるのに対し、(29b)は不適切な文である。これは「千円札」という具体物自体は価値のあるものとは捉えにくいからだと考えられる。だが、「千円札」が「受け手」にとって何らかの価値のあるものとして捉えられれば、たとえば「(千円札を集める人が)昭和32年に発行された千円札をやっと得ることができた」のような場合は適切な文になるのである。このように、「得る」の対象は「受け手」にとってプラス評価のもの、すなわち「受け手」にとって何らかの価値のあるものであると考えられる[6]。したがって、(28a)と(28b)における「千円」はそれぞれ「具体物としての千円」「千円の価値」のように異なるものと言えよう。この点については次節で考察する「得る」と共起するヲ格名詞の意味素性の相違からも明らかである((33)参照)。本稿ではこのような意味素性を《価値性》と呼ぶことにする[7]。そして、「もらう」は(26a)～(29a)のように描くことができるので、対象の《価値性》という意味素性についてはニュートラルであると言える。

以上のことより、先の(24)(25)の「人気・力を得る」が描いているのは、当然の結果であるかどうかという事柄であるというよりは、話し手(書き手)が「人気・力」を価値のあ

るものと捉えているかどうかにかかわるものと考えられる。

4．2．3．共起するヲ格名詞

4.2.2.節により、「得る」は《価値性》という意味素性を持っていると考えられる。ところで、次の(30)(31)の場合は、「小遣い、お年玉、金一封」という「受け手」にとってプラス評価のものが対象であるのにもかかわらず、「得る」で描くと不適切な文になる((30b)(31b))。

(30) a. なに、そればかりか、あいつはお母様から毎月小遣いを**貰って**いる。　(＝(3))

b.*～あいつはお母様から毎月小遣いを**得て**いる。

(31) a. 病院のすべての従業員、出入りの大工から植木屋までがそこに並んで、青山の式を終えてやってきた徹吉院長から、お年玉を、ひさが手ずからしつらえた金一封を**貰って**いた。　(楡家、p.932)

b.*～徹吉院長から、お年玉を、ひさが手ずからしつらえた金一封を**得て**いた。

このような適格性の相違は「もらう」と「得る」の共起するヲ格名詞の意味素性の違いによるものと考えられる。そして、「もらう」と「得る」の共起するヲ格名詞の意味素性は、それぞれと共起するヲ格名詞の分布の考察によって明らかになると考えられる。「もらう」と「得る」の共起するヲ格名詞(抽象名詞)は、実例からすると次の通りである。

(32) 許可、許し、証明、休暇、暇、仕事、内定、権利、連絡、電話[8]、チャンス、援助、通知、勇気などを**もらう**。

(33) 許可、許し、納得、同意、了解、協力、理解、支持、信頼、承認、助け、援助、賛同、承諾、内諾、働き口、権利、人気、好評、名声、ヒント、アイデア、自信、勇気、同情、力、感動、チャンスなどを**得る**。

「もらう」はほとんどの具体名詞をヲ格名詞として取っており、抽象名詞をヲ格名詞として取る場合は、(32)のようなヲ格名詞に限ると考えられる。そこで、「もらう」と共起している抽象名詞を、具体物の物理的な空間移動を表すという意味素性を持つ「受け取る[9]」と共起させてみると、「許可(書)、証明(書)、援助(品)、通知(書)」などのように具体物

として捉えられるヲ格名詞とだけ「受け取る」が共起できることが分かる。よって、「もらう」と共起するヲ格名詞は具体物が大部分であり、抽象名詞である場合もそれらの大部分は具体的なものとして捉えることができるものであると考えられる[10]。そして、本稿ではこのように共起するヲ格名詞が具体物である傾向があるという意味素性を《具体性》と呼ぶことにする。

一方、「得る」と共起するヲ格名詞を「受け取る」と共起させてみると、「許可、援助」のように「もらう」とも共起するヲ格名詞としか共起できない。また、「得る」と共起する抽象名詞の数も「もらう」に比べ多く、その大部分は現実世界では具体物として捉えにくいものである。そこで、「得る」は抽象的なものを対象として取る傾向があると考えられる[11]。このような意味素性を《抽象性》と呼ぶことにする。

そこで、先の(30)(31)における「小遣い、お年玉、金一封」というのは、「受け手」にとって価値のあるものではあるが、それぞれの名詞の意味素性が《抽象性》のものとして捉えにくいものであるため、(30b)(31b)のように「得る」で描くと不適切になるものと考えられる。

以上のことより、「もらう」と「得る」は対象の《具体性》と《抽象性》という意味素性で互いに対立していると言える。

5．まとめ

以上、「もらう」と「得る」の意味分析を行い、それらがどのような意味素性で共通し、また対立しているかについて考察してきた。以下に、「もらう」と「得る」の意味素性をまとめる。

〈図 1〉

意味素性 ＼ 語彙素	共通の意味素性	弁別的意味素性				
	《所　有》	《授受性》	出来事の描写		対象の意味素性	
			《恩恵性》	《価値性》	《具体性》	《抽象性》
もらう	＋	＋	＋	±	＋	－
得る	＋	－	－	＋	－	＋

【＋：意味素性を持つ、－：意味素性を持たない、±：ニュートラルな素性】

(1)「もらう」と「得る」は所有に関わる出来事を描くという共通の意味素性で同じく「所有の語野」に属している。

(2)「もらう」は「与え手」から「受け手」に向かって対象が移動してくるという《授受性》を持っているが、「得る」は対象を所有している状態に焦点が当てられており、《授受性》という意味素性は持っていない。したがって、「もらう」と「得る」は《授受性》という意味素性において互いに対立していると言える。

(3)出来事の描写において、「もらう」は「与え手」に対して恩恵、感謝、受益などの主観的な感情を持って事柄を描くという《恩恵性》を持っているが、「得る」はこのような意味素性は持っていない。また、「得る」は、対象として「受け手」にとってプラス評価のものを要求するという《価値性》を意味素性として持っているが、「もらう」はこのような意味素性についてはニュートラルである。したがって、「もらう」と「得る」は《恩恵性》という意味素性においては互いに対立していると言える。

(4)「もらう」と「得る」の共起するヲ格名詞の分布を見ると、「もらう」は《具体性》のものを、「得る」は《抽象性》のものと共起する傾向が見られる。よって、「もらう」と「得る」は《具体性》と《抽象性》という意味素性で互いに対立していると言える。

【注】

*1 この考え方はトゥリーアによって提唱されたものであり、日本語訳では「語彙の場、語場(champs lexicaux、Wortfeld、lexikalisches Feld)とも呼ばれるが、本稿では「語野」と呼ぶことにする。

*2 しみず(1977)は所有の移動を表す動詞を格の枠組みによって、「あげる、貸す、教える、授けるなど」「もらう、借りる、習う、授かるなど」「奪う、取る、盗むなど」の三つに類別している。

*3 本稿では、「もらう」の補助動詞としての用法、視点や人称の制限、敬語の問題などのいわゆる「やりもらい表現」については触れない。また、「もらう」と「得る」の文体差についても触れない。

*4 本稿では意味素性を《　》で示す。

*5 本稿では「もらう」と「得る」の構文的な特徴については取りあげないが、「もらう」と「得る」における《授受性》という意味素性の対立は、「もらう」と「得る」の構文的なふるまいの違いからも捉えることができると考えられる。「もらう」が「Xガ　Yカラ／ニ　Zヲ　もらう」という構文を取るのに対し、「得る」は「Xガ（Yカラ／ニ）Zヲ　得る」のような構文を取る。これは、「得る」における「与え手　Y」は現れる場合も現れない場合もあるということであり、よって対象が「与え手」から「受け手」に向かって移動してくるという事柄はもともと含意しないものと考えられる。

*6「貧しさゆえに病を得て、貧しさゆえに文字を知らない人びとである。」(天声'87・3)、「だが、息子と娘については、父親は、悲しい知らせしか得ることはできなかった。」(陥落、p.423)のような場合、それぞれのヲ格名詞は、受け手にとってプラス評価のものではない。しかし、前者は慣用的な表現であると考えられるし、また、後者は「*父親は悲しい知らせを得た」のように描くと不適切であること

から、父親が望んでいたのは「嬉しい知らせ」であるが、結局得たのは「悲しい知らせ」であったという皮肉的な表現であると考えられる。したがって、これらが受け手にとってプラス評価のものをヲ格名詞として取るという「得る」の意味素性に反するものであるとは捉えにくい。

*7「得る」の《価値性》という意味素性は、「～てしまう」というアスペクト成分との共起関係からも捉えることができると考えられる。たとえば、「私はお金をもらってしまった」のように描かれた事柄を、「*私はお金を得てしまった」のように「得る」で描くと不適切となる。寺村(1984：153)によると、「～てしまう」は「その事が起こって、もはや起こる前の状態に戻ることはできないという心理を表す。それは自分ではどうしようもないできごとの場合は悲しみを、自分のしたことならば後悔を伴うのがふつうである」としている。よって、「*お金を得てしまう」が不適切であるのは、「～てしまう」の話し手の後悔を表すという意味素性と「得る」の話し手が対象を価値性のあるものとして捉えるという意味素性が矛盾するからであると考えられる。この問題についてはアスペクトの面からの考察も必要であると考えられるので、本稿ではこのような現象の指摘に留めたい。

*8「三日後、喫茶店から郵便物が届いたとの電話をもらうと、男は早速店へ出かけた。」(ショ、p.69)のようにかかってくる電話の場合。

*9 国立国語研究所(1972)によると、「受け取る」は所有権がどこにあるかは、まったく問題にならず、単なる空間的・物理的なうけわたしをあらわす。

*10 「もらう」は抽象名詞のうち次のようなヲ格名詞とは共起しない。【 ?同意／*了解／*協力／*理解／*支持／*信頼／*助け／*尊敬／*人気／*感動／*成功／*自信／*納得／*批判／*ショック／*診断を**もらう**】これらの抽象名詞は「受け取る」と共起しないものであり、現実世界において具体的なものとして捉えにくいものである。

*11 「得る」は抽象名詞のうち次のようなヲ格名詞とは共起しない。【*批判／*ショック／*通知／*診断／*連絡／*評価を**得る**】これらの抽象名詞は「受け取る」と共起しない。このような抽象名詞と「得る」との共起関係については「受ける」との対照によって明らかになると考えられるが(批判／ショック／通知などを受ける)、本稿ではこの問題については取り上げない。

【参考文献】

石綿敏雄・荻野孝野(1983)「2. 結合価から見た日本語文法」『文法と意味Ⅰ』朝倉日本語新講座3、水谷静夫他、朝倉書店

大江三郎(1975)『日英語の比較研究－主観性をめぐって』南雲堂

奥田靖雄(1983)『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書店

奥津敬一郎(1979)「日本語の授受動詞構文－英語・朝鮮語と比較して－」『人文学報』132、東京都立大学(『拾遺 日本語文法論』(1996)、ひつじ書房 所収)

――――(1983)「授受表現の対照研究－日・朝・中・英の比較－」『日本語学』2-4

――――(1984)「授受動詞文の構造－日本語・中国語対照研究の試み－」『金田一春彦博士古希記念論文集』第2巻

――――(1986)「やりもらい動詞」『国文学 解釈と鑑賞』51-1、至文堂

久野暲(1978)「第二章 視点」『談話の文法』大修館書店

国立国語研究所(1964)『分類語彙表』(国立国語研究所資料6)秀英出版

――――――(1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』(国立国語研究所報告43)秀英出版

コセリウ．E(1982)『構造的意味論』コセリウ言語学選集 第1巻、宮坂豊夫・西村牧夫・南館英孝 訳、三修社

佐久間鼎(1966)「十三 移動と受給の表現」「十五 発動受動・移動および受給の相互関係」『現代日本語の表現と話法 《増補版》』恒星社厚生閣

柴田省三(1975)「5. 成分分析」『語彙論』英語学大系 第7巻、大修館書店

柴谷方良(1978)「第6章 意味関係」『日本語の分析』大修館書店
しみずやすゆき(1977)「所有の移動をあらわす動詞と格の枠組」『松村章教授還暦記念 国語学と国語史』明治書院
杉本 武(1986)「第3章 格助詞」『いわゆる日本語助詞の研究』奥津敬一郎他、凡人社
――(1991)「二格をとる自動詞－準他動詞と受動詞－」『日本語のヴォイスと他動性』仁田義雄編、くろしお出版
――(1999)「受動文の動作主表示の『から』について」『空間表現の文法化に関する総合的研究』文部省科学研究費報告書、筑波大学
砂川有里子(1984)「『ニ』と『カラ』の使い分けと動詞の意味構造について」『日本語・日本文化」12、大阪外国語大学
高田 誠(1982)「格の表現形式 ドイツ語」『講座日本語学10 外国語との対照Ⅰ』明治書院
――1990)「第5章 語彙」『対照言語学』石綿敏雄・高田誠、おうふう社
寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
――(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
福本喜之助・寺川 中 編訳(1975)『現代ドイツ語の源流』大修館書店
益岡隆志(1987)「第2部 述語句の基本的構成をめぐって」『命題の文法－日本語文法序説』くろしお出版
宮地 裕(1965)「『やる・くれる・もらう』を述語とする文の構造について」『国語学』63
――(1972)「類義文について」『語文』第30輯、大阪大学
森田良行(1996)『意味分析の方法－理論と実践－』ひつじ書房
Bendix, E.H.(1966) *Componential analysis of general vocabulary : The semantic structure of a set of verbs in English、Hindi、and Japanese.* Bloomington and The Hague.
Coseriu, E. and Geckeler, H. (1981) *Trends in Structural Semantics.* Gunter Narr Verlag Tübingen

【用例出典】

(天声'年度・月)－朝日新聞『天声人語』
(決闘)－赤川次郎(1989)『決闘』角川書店
(最期)－阿刀田高(1985)『最期のメッセージ』講談社
(ショ)－星新一 編(1991)『ショートショートの広場3』講談社
CD－ROM版 新潮文庫の100冊
(青春)－石川達三(1968)『青春の蹉跌』
(黒雨)－井伏鱒二(1965)『黒い雨』
(沈黙)－遠藤周作(1966)『沈黙』
(楡家)－北杜夫(1964)『楡家の人びと』
(一瞬)－沢木耕太郎(1981)『一瞬の夏』
(陥落)－塩野七生(1983)『コンスタンティノープルの陥落』
(原点)－高野悦子(1971)『二十歳の原点』
(数学)－藤原正彦(1978)『若き数学者のアメリカ』
(雁寺)－水上勉(1969)『雁の寺・越前竹人形』
(世界)－村上春樹(1985)『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』
(花埋)－渡辺淳一(1970)『花埋み』
＊出典が示されていないものは作例。